2024年5月12日（日）主日朝礼拝説教

『天に昇り、神の右の座に』井上隆晶牧師
使徒言行録１章3～11節、マルコによる福音書16章19～20節

❶【神の右の座に着かれた】

使徒言行録に「**イエスは弟子たちが見ているうちに、天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。**」（使徒 1：10）とあります。主はあえて弟子たちに天に昇る姿を見せられました。マルコ福音書には「**主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。**」（マルコ16：19）とあり、使徒信条でも「天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり」と告白されています。誰も神様の右の座にイエス様が着かれたのを見た者はいませんから、これは教会の信仰告白です。イエス様が神の右の座に座ったというのは、イエス様は父なる神様と同質、同座なる神であり、神の右に座ることは、裁きの全権を委ねられた神の国の王であることを意味しています。そのことはイエス様自身もいっておられたことです。「**父は誰をも裁かず、裁きは一切人に任せておられる。**」（ヨハネ 5：22）これはユダヤ教やイスラム教では決してありえないことです。彼らのメシアは人であって神ではないからです。

●讃美歌２１の337の２番「み国の扉ハレルヤ、今こそ開けハレルヤ、死にうち勝たれハレルヤ、主は帰られたハレルヤ」と歌った時、メッセージが浮かびました。元々キリストは天の住人なのです。地上に33年間仮住まいされましたが、地上で救いを成し遂げて懐かしいわが家に帰ったのです。だから「神の国の扉」が開いたのです。「お帰りなさいませ！」といって父なる神と天使たちと聖人たちが**凱旋したキリストを迎えられたことでしょう。王が戻られたのです。王の帰還です。（後奏の曲名を見よ！）**私たちも同じなのです。地上が終わったから、余りとして天に行くのではなく、天から地に送られ、また天に帰るのです。「**あなたは人を塵に返し、人の子よ、帰れと仰せになります。**」（詩編 90：3）地上は仮の宿であって、仕事が終わったら天に帰るのです。「**私たちの本国は天にあります。**」（フィリピ3：20）

私たちの礼拝堂には、キリストが神として父なる神の右に座しておられるイコンがあります。私たちはこの絵を仰ぎ、天上におられる三位一体の神、天の王に祈るのです。昇天祭はキリストは神であることの教会の信仰告白です。

❷【受肉、十字架、復活、昇天によって人間全体が救われた】

昇天はキリストの救いの最後の業を教えています。よく「十字架によって救われた」という人がいますが、それは救いの一部に過ぎません。**キリストの受肉、十字架、復活、昇天というすべての過程によって人間全体が救われるのです。キリストの受肉は救いの始まりであり、十字架によって罪を取り除き、復活によって死を取り除き、昇天によって人間性を天に引き上げ、完全に人間の救いが完成し**

たのです。この一体の神秘によって人の救いは完成します。旧約聖書の中に預言者エリシャが死んだ子供を生き返らせた奇跡の話がのっています。「**子供の上に伏し、自分の口を子供の口に、目を子供の目に、手を子供の手に重ねてかがみ込むと、子どもの体は暖かくなった。**」（列王記下 4：34）それと同じように、神は人間にご自分を重ね合わされ、人間と一体になられます。そして人間の誕生から死までを同じようにご自分も体験し、それらを引き受けて、ご自身の中で癒すのです。ですから私たちは降誕～十字架～復活～昇天という一連のキリストのすべて業によって救われるのです。これが伝統的な教会の教えです。

●私は聖餐をいただいた時に、いつも「ああ、キリストはよくもこんな罪人の所まで降ってきて下さったものだ」と有難く感じるのです。聖餐式はキリストの降誕、十字架、復活、昇天の再現です。パンが裂かれることは十字架を意味し、パンが私たちの中に入ることは、キリストが汚れた飼い葉桶に横たわったことを意味します。パンと私たちが一体になることによって、地に属する私たちは天に属する者に変えられ、天に引き上げられるのです。実際、ビザンチン典礼では聖餐の最後にパンと杯を高く掲げる行為をしますが、キリストの昇天を意味します。

私たちは自分の力では、天国に昇れませんが、降ってこられた方、すなわちキリストと一体になり、彼の肩にしっかりと担がれ、腕に抱かれ、彼によって神の国に連れて行ってもらうのです。4 世紀のニュッサのグレゴリオスはこう語ります。「さまよっている羊のもとへ、…ご自分の命を捨てるあの良い牧者が来られます。そして、さまよっている羊を見つけ、後に十字架をも担がれたその肩に見つけた羊を乗せ、乗せたその羊を天上のいのちへと導き入れてくださったのです。」

❸【キリストは教会という体で今も共におられる】

天使は、弟子たちにいいました。「**ガリラヤの人たち、なぜ、天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。**」（11 節）「なぜ」とは奇妙な問いかけです。イエス様が去って行かれたので「ああ行っちゃったんだ」と寂しく見上げていたわけです。しかし「なぜ天を見ているのか」という言葉をもって、**天使たちは過ぎ去った過去ではなく、未来を向きなさい、天ばかりでなく地上を見なさいと言っているようです。**天使は、弟子たちにこういったのです。「イエス様が自分たちから遠くに去ってしまったと悲しんではならない。必ずイエス様は戻って来られる」これは聖霊が降ることによって実現しました。三位一体の神は分離できないので、聖霊が地に臨む時、御子と御父も共に来られます。イエス様は「**私を愛する人は、私の言葉を守る。私の父はその人を愛され、父と私とはその人のところに行き、一緒に住む**」（ヨハネ 14：23）と言われました。4 世紀のアウグスティヌスはこう言っています。

●「主は私たちの所に降って来られた時、天を去ったわけではなく、再び天に昇られた時も、私たちから身を引かれたのではありません。」

共におられるのですが、その有り様が変ったのです。今までは「肉体の姿」で共におられたのですが、これからは「教会という姿」で共にいて下さるのです。週報の表紙のイコンがそれを教えています。昇天したキリストと、直立不動の姿をもって祈りのポーズを取るマリアは一直線で描かれています。**マリアは教会のイメージとして描かれています。**イエス様は神なので、地上で働くためには肉の体が必要であったように、教会という体（からだ）で今は働いておられるのです。ですから教会に来た時、ここにキリストはおられると思わなければなりません。教会にはキリストの霊が満ちています。教会に来るとキリストを思い出す為のあらゆるものがあります。聖堂、聖書、聖餐、讃美歌、イコン、十字架、祭壇、ともし火、香、祭服…。ここで讃美し、聖書を聞き、聖餐に与るとキリストが現れます。こうして「**私は世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる**」（マタイ 28：20）が実現したのです。

●教会は嫌いだ！奉仕がしんどいし、人間関係が煩わしいから行きたくないという人がいます。フィリップ・ヤンシーもＣ・Ｓ・ルイスも若い頃、教会が偽善的で嫌いになり離れました。しかし彼らは戻ってきました。Ｃ・Ｓ・ルイスはこう書いています。「私は讃美歌が大嫌いで、下手な歌詞に、さらに下手な曲がつけられているようなものだと思っていた。だが、そのうちに、私はその価値が見えてきた。…讃美歌は、それでもゴム靴を履いて向こう側の席に座っている年老いた聖徒によって、信仰と奉仕の気持ちをこめて歌われていることに気づいたのだ。そのとき、自分にはその靴をきれいにする値打ちもないことに気づいた。それが分かった時、ひとりよがりのうぬぼれた気持ちは拭い去られていた。」ヤンシーはこう語ります。「教会は本来、楽しみを提供したり、弱さを励ましたり、自尊心を育てたり、友情を育んだりする場所ではなく、神を礼拝する場所である。この点で失敗するならその教会は失敗である。…礼拝のための装飾品も、礼拝する人を神と出会わせるための道具にすぎないことを私は学んだ。…ウォルター・ウィングはこのように言う。礼拝とは、その家の主人が誰であるのかを思い出すことである、と。」

天と地はキリストにあって神秘的に一つに結ばれました。教会はキリストの体であって、天と地の両方の性質をもつ場です。ここには「天国の門」が開いています。教会は地に属する者を天に引き揚げる場、皆さんを神化、キリスト化する場所です。教会が地上の香りしかしなかったら人はそこにどんな希望を持つでしょうか？天の香りを感じるからこそ人々は希望を持つのです。ここにおられる主人、キリストに賛美を献げ、ぜひ出会っていただきたいと願います。